

# 国語科論文

自ら学び続ける授業の創造

## 自分のことばを求め続ける国語科授業の創造



I	研究の目的	
1	研究の背景	9
2	研究の方向	10
II	研究内容	
1	自分のことばを求め続ける国語科授業とは	11
2	自分のことばを求め続ける国語科授業創造のために	12
	(1) 自分のことばを求め続ける姿の設定	
	(2) 自分のことばを求め続ける学習内容	
	(3) 自分のことばを求め続ける指導方法	
III	研究の方法	
1	手順と方法	14
2	研究計画	15
IV	研究の実際	
1	実践の基本的な立場	15
2	授業の実際と考察	16
	(1) 第2学年「たしかめながら読もう」の実践	
	(2) 第6学年「聞き手の心に届くように発表しよう」の実践	
V	研究の成果と課題	22

本研究は、子どもたちが意欲的に自分の伝えたい内容を持ち、その伝えたい内容にぴったりで、相手に伝えるのにもぴったりな自分のことばを求め続ける姿が数多く表れる授業を目指している。そのために、授業の中に目指す子どもの姿を設定して、必要な学習内容や指導方法を探っていく。

## I 研究の目的

### 1 研究の背景

自分の考えをもち、それを相手や目的等を意識して伝えることができていない。

社会の少子高齢化に伴い核家族化が進み、コミュニケーション不足が指摘されている。一方、高度情報化社会の基、音声言語ではなく、文字言語だけのコミュニケーションが発達してきている。

メールに代表される文字言語だけのコミュニケーションは、一方通行に自分の意見や考えを伝えられるため、自己中心的な発言が多く見られたり、音声言語を介さないために、人と人とのつながりが希薄になり、本当に伝えたいことを、相手の目を見て伝えられない人が多くなったりしている。

学校教育の中でも、このような社会の現状から、「伝え合う力」の育成のためにコミュニケーション能力を重視し学習を進めてきたが、その力が実際の場面である日常生活に生かされているとは言い切れない。

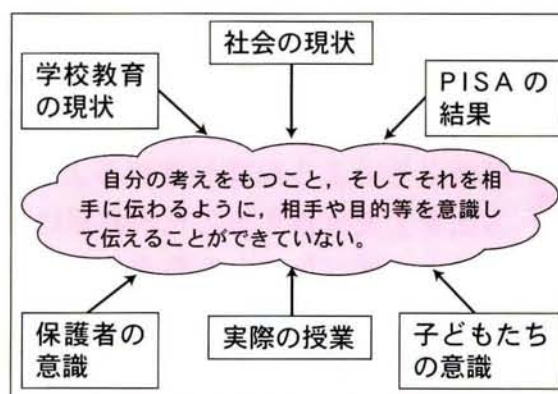
また、PISA2003の結果から、読解力の低下が言われている。PISAという読解力は、テキストの解釈という意味だけではなく、テキストを解釈し、自分の考えと照らし合わせて伝えるまでの力をいう。文部科学省でも「PISA型読解力」として、自分の考えをもち、伝えることに重点を置きつつある。PISA型読解力の低下は、自分の考えをもち、その考えを伝えるまでの力がしっかり身に付いていないことを示している。

また、保護者の意識としても、子どもたちに対して、授業中に積極的に発言するだけではなく、いろいろな場で自分の意見をしっかりと伝えるようになってほしいと感じているようである。

本校の子どもたちの国語の授業に対する意識調査から見ても、授業の中で教材文や、その他の図書資料を読むことは好きだが、自分の考えをもって、それを文章にして伝えるような授業に苦手意識を感じているようである。また、自分の考えを文章にして書くことを苦手としている子どもたちは、自分の考えをもつこと自体を苦手としていることが分かった。この結果は、PISAの調査で、問題に対して無回答の子どもが多かったことと同じ傾向を示している。

実際の授業を通していても、自分の考えをもって、その考えを発表することには個人差があり、授業中発表する子どもが固定化しつつあるように感じられる。

以上のことから考えると、自分の考えをもつこと、そしてそれが相手に伝わるように相手や目的等を意識して伝えることができていないのではないかと考える。



【図1 研究の背景】



## 2 研究の方向

私たちは今まで、「思考力・判断力（理由付けの仕方）」に着目し、その発達段階を探り、その発達段階に合わせた学習内容や指導方法について研究してきた。

その結果、すべての領域「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」において、身に付けさせたい「知識・技能」と「思考力・判断力（理由付けの仕方）」をよりよく獲得するための学習内容が設定できた。その学習内容を基に授業を展開していくことにより、子どもたちは授業の中で、今まで得てきた「知識・技能」を生かして「思考力・判断力（理由付けの仕方）」を働かせて、自分の伝えたいことをもち、表現力を生かして、伝えたいことを伝えようとしている姿が見られるようになった。

しかし、一人一人を見てみると、自分の伝えたいことをもって、伝えたいことを意欲的に伝えようとしていない子どもも見られる。

その原因として以下の三つが考えられる。

- (ア) 対象が自分の伝えたいことをもつほど、魅力的なものになっていない。
- (イ) 自分の伝えたいことを伝えることに、切実感や必要感がない。
- (ウ) どのように伝えたらいいのかという方法の見通しがない。

つまり、子どもたちにとって学習する対象が魅力あるものや、対象が自分の伝えたいことや切実感をもてる内容であったり、子どもたちが、どのように伝えたらよいかという見通しがもてたりというような、「関心・意欲・態度」の側面からもう一度学習内容を吟味すれば、子どもたちは意欲的に自分の伝えたいことを伝えようとするのではないかと考える。

その意欲的な姿とは、自分の伝えたいことを求め、そのことをどのように伝えればよいかを考えている状態である。

よって、本研究では、自分の伝えたいことを求め、それがよりよく伝わるように、ことばを求めている子どもを育てたいと考える。

そのためにはまず、そのような子どもの姿とは、具体的にはどのような姿なのかを単元レベルではっきりさせる必要がある。

次に、そのような姿が表れるための学習内容はどのようなものが必要かを考える。最後にそのような姿が表れるように指導方法を工夫改善することが必要になってくる。

以上、述べたことを踏まえて、研究主題を以下のように設定した。

**自分のことばを求め続ける国語科授業の創造**



自分の伝えたいことを求め、それがよりよく伝わるように、ことばを求めている子どもを育てる。



### Ⅲ 研究内容

#### 1 自分のことばを求め続ける国語科授業とは

「ことば」とは、人々が感情や意志、考えなどを伝えるために用いる音声や文字に、相手に自分の伝えたいことがしっかりと伝わるようにという気持ちまでが合わさっているものだと考える。

つまり「自分のことば」とは、自分の伝えたいことが、相手にしっかりと伝わるようにと考えられた、借り物ではない、自分が選択し決定して使おうとしたことばであると考え。

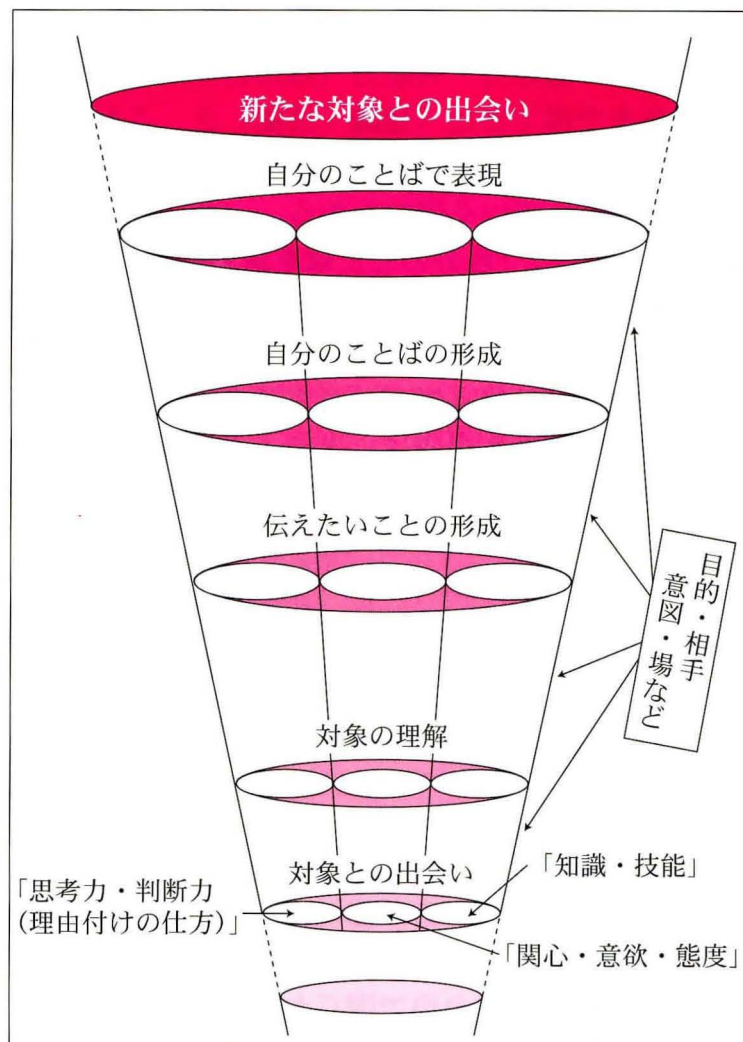
よって「自分のことばを求め続ける」とは、対象に出会って、それを理解してから、自分の伝えたいことをもち、自分のことばで表現するまでの一連の働きが繰り返されることであると考え。

詳しく説明すると子どもたちは、まず対象と出会い、それを理解し、自分の伝えたいことをもつ。そのとき頭の中で、過去の経験から得た「知識・技能」と「思考力・判断力（理由付けの仕方）」を使い「自分のことば」で、自分の伝えたいことをもつ。次に自分の伝えたいことを伝える。自分の伝えたいことを伝える際には、先ほど頭の中で考え、作ったものをそのまま伝えてはいない。相手や目的、場や意図などに応じて適切なことばを探し出して、「自分のことば」で伝えている。つまり、「自分のことば」をいつも求め続けているのである。

この自分のことばを求め続けている姿に欠かせないのは、「関心・意欲・態度」であると考え。なぜなら、相手に伝えたいことを伝えようという気持ちだが、この一連の活動を行わせていると考えるからである。

また、この活動を繰り返すことにより、新たに「知識・技能」を得たり、新たな「思考力・判断力（理由付けの仕方）」が身に付いたりして、次の対象への「関心・意欲・態度」も高まると考える。

以上を踏まえ、「自分のことばを求め続ける国語科授業」とは、「関心・意欲・態度」と「知識・技能」、「思考力・判断力（理由付けの仕方）」が絡まり、自分が伝えたいことを相手に伝えるために、よりよいことばを絶えず求めている授業である。



【図2 自分のことばを求め続ける姿】

自分の伝えたいことをもち、自分のことばで表現するまでの一連の働きが繰り返される授業。



## 2 自分のことばを求め続ける国語科授業創造のために

自分のことばを求め続ける姿は、「関心・意欲・態度」の絡まった姿。

### (1) 自分のことばを求め続ける姿の設定

自分のことばを求め続ける授業創造のためには、子どもたちに、どんな姿になってほしいかという目標となる姿を、教師がもつ必要がある。

自分のことばを求め続ける姿とは、子どもたちが、対象に関して「関心・意欲・態度」を高め、自分の伝えたいことを表現しようとするときに、新たに「知識・技能」、「思考力・判断力（理由付けの仕方）」を獲得する姿である。また同じように、今まで得てきた「知識・技能」と、これまで培ってきた「思考力・判断力（理由付けの仕方）」を働かせて、自分の伝えたいことを表現することで「関心・意欲・態度」が高まっていく姿でもある。

よって、「自分のことばを求め続けている姿」は、「知識・技能」や「思考力・判断力（理由付けの仕方）」、「関心・意欲・態度」が絡まった姿として設定することができる。

例えば、第4学年「話すこと・聞くこと」の単元「調べたことを伝えよう」での目指す子どもの姿は、次のように設定できる。この姿は、単元の終末段階、自分の調べたことをスピーチで発表する段階の姿である。

「知識・技能」	「思考力・判断力 （理由付けの仕方）」	「関心・意欲・態度」	自分のことばを求め続ける姿
○ 筋道立てて話す。 ○ 相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話す。	○ 複数の事例を関係付けて考える。	○ 相手に伝わるように、分かりやすくゆっくり大きな声で話そうとする。	○ 複数の事例から得た自分の考えを、筋道立てて相手に分かりやすく発表する。

この姿は、各単元の各過程によって異なり、また一単位時間の中でも異なった姿として表れる。その姿は、「知識・技能」に片寄ったり、「思考力・判断力（理由付けの仕方）」に片寄ったりする。大事なのは、この姿が、各領域、各単元、各時間の各指導過程の中で明らかになることであり、その姿を教師がいつも意識して指導し、評価することである。

### (2) 自分のことばを求め続ける学習内容

学習内容を子どもたちが学び取るもの全てとしたとき、国語科では、子どもたちが「知識・技能」「思考力・判断力（理由付けの仕方）」を身に付けるために行う言語活動も、学習内容とすることができる。なぜならば、言語の教育としての国語科の目標を、言語活動なしに身に付けることはできない。また言語活動自体が目標になっている場合もあると考えるからである。

学習指導要領解説にも、「適切な言語活動を設定することが、児童の主体的な学習活動を促しながら学習の効果を上げることができる」とあるように、適切な言語活動を設定することが何より大切である。自分のことばを求め続ける学習内容を設定する際にも、「関心・意欲・態度」の側面から吟味した言語活動を設定することが大切である。

例えば第2学年単元「じゅんじょに気をつけて読もう『たんぼぼのちえ』」では、順序を表す言葉に着目して説明文を読ませ、順序を表す言葉を使って、たんぼぼの



ちえ等を書かせる単元である。ここでは、子どもたちに順序を表す言葉の価値に気付かせることがまず大事だが、そのために、段落ごとに紙芝居にまとめさせるという言語活動を取り入れ、まとめた紙芝居を使ってたんぼぼのちえを発表させる。すると子どもたちは、興味のあるたんぼぼのちえを理解すると同時に、紙芝居をめくるときにどうしても必要となる順序を表わす言葉の価値を実感することができる。

このように、どんな言語活動をもち込んで指導するかによって、子どもたちにとって必要な能力を、しっかりと身に付けさせることができるとともに、その活動に意欲的に取り組ませることができる。

では、どのような言語活動を設定すればよいかを考えるために、まず学習指導要領解説の言語活動例に取り上げられている言語活動を洗い出してみた。

【表1 学習指導要領解説に示されている言語活動例】

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
「話すこと・聞くこと」	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 尋ねたり，応答したりすること。</li> <li>○ 自分が体験したことなどについて話をする。</li> <li>○ 友達の話を聞く。</li> <li>○ 読んだ本の中で，興味をもったところなどを紹介すること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 身近な話題についてスピーチすること。</li> <li>○ 要点などをメモに取りながら聞く。</li> <li>○ 身近な出来事や調べた事柄について説明したり報告したりすること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の考えを，資料を提示しながらスピーチすること。</li> <li>○ 目的意識をもって友達の考えを聞く。</li> </ul>
「書くこと」	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 絵に言葉を入れる。</li> <li>○ 伝えたいことを簡単な手紙に書く。</li> <li>○ 先生や身近な人などに尋ねたことをまとめる。</li> <li>○ 観察したことを文にまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 手紙を書く。</li> <li>○ 自分の疑問に思った事などについて調べてまとめる。</li> <li>○ 経験したことを記録文や学級新聞などに表わす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 礼状や依頼状などの手紙を書く。</li> <li>○ 自分の課題について調べてまとめた文章に表わす。</li> <li>○ 経験したことをまとめた記録や報告にすること。</li> </ul>
「読むこと」	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 昔話や童話などの読み聞かせを聞く。</li> <li>○ 絵や写真を見て想像を膨らませながら読む。</li> <li>○ 自分の読みたい本を探して読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 読んだ内容に関連した他の文章を読む。</li> <li>○ 疑問に思った事などについて関係のある図書資料を探して読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の課題を解決するために図鑑や辞典などを活用して必要な情報を読む。</li> <li>○ 読書発表会を行う。</li> </ul>

上記の表1を見ると、高学年に近づくにつれて、「話すこと・聞くこと」では、より相手を納得させるための方法が増えたり、詳しくなったりしている。また、話したり・聞いたりする内容に、より自分の考えが必要になっている。

「書くこと」では、より形式がしっかりと決まっているものを書かせている。また、内容に自分の考えがより必要になっていたり、量としても増えたりしている。

「読むこと」では、より必要な情報を探して読むことが重視されている。また、自分の考えを深めるために読むという意識が高い。

以上のことから、発達段階をしっかりと押さえているが、果たして、それらが本当に子どもたちが、考えてみたい内容であったり、表出してみたい内容であったりするのかについては、「**関心・意欲・態度**」，**培いたい「思考力・判断力（理由付けの仕方）」**，**「知識・技能」**の面から吟味する必要がある。



### (3) 自分のことばを求め続ける指導方法

自分のことばを求め続けるための指導方法を考えるとき、やはり「関心・意欲・態度」「知識・技能」「思考力・判断力（理由付けの仕方）」を高めるという視点が必要になる。その視点で考えたとき、以下の三つが効果があるのではないかと考える。

#### ① 事象提示の工夫

意欲的に自分のことばを求め続けるためには対象が魅力あるものに見える必要と、自分が言語活動として行っていくために見通しがもてるものでなくてはならない。つまり**事象提示の仕方**を工夫する必要がある。

例えば、海の生き物を内容として扱う単元では、「海の生き物クイズ」を行う。そうすることで、子どもたちが今から行う学習内容に意識を集中させることができるし、レディネスとしてどれくらいの知識をもっているかを把握することもできる。

他にも1分間スピーチを行う単元であれば、今までの1分間スピーチの様子と、今から行いたい発表モデルの1分間スピーチをビデオを使って比較させる。そして、どんなところが異なるか、どんな姿を求めているかを話し合う活動を取り入れることにより、今から行う学習に意欲的に取り組むことができる。



#### ② 学習課題の設定

子どもたちが意欲的に毎時間の学習を進めるためには、単元や毎時間の学習課題の設定の仕方が大事である。低学年は長い時間を見通しての学習課題を設定することはできないが、高学年になるにつれて、長い時間を見通しての学習課題を設定した方が意欲的に取り組む場合がある。よって、学年に応じた学習課題の設定の仕方が必要になってくる。

また単元として、導入時に立てた学習課題が授業が進むにつれてより高次になり、学習課題が変化していくということも考えられる。

#### ③ 相互評価と自己評価

自分のことばを求め続ける授業のためには、自分の考えが、相手にどれだけ伝わったかというところが客観的な評価となる。よって相互評価が必要となる。

また、「関心・意欲・態度」も重視する点から、自己評価も大事な部分になる。相互評価や自己評価については、評価を行う場を設定することを大事にしていく。

## Ⅲ 研究の方法

### 1 手順と方法

研究については図3のような手順で行っていく。

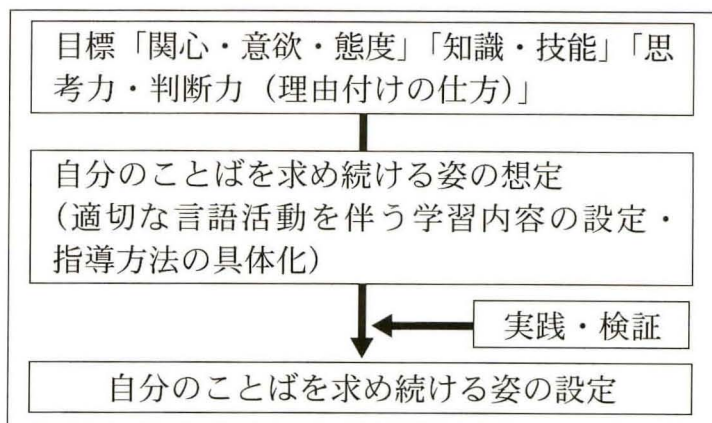
まず授業前に単元の目標分析を行い、自分のことばを求め続ける姿を想定する。想定した姿を目指して、適切な言語活動を伴った学習内容を設定し、指導方法を具体化して実践を行う。



全単元で繰り返し実践を行う。

実践の結果から、自分のことばを求め続ける姿が設定されていく。

このような手順で全ての単元を実践し、検証していくことにより、より妥当な言語活動を設定したり、指導方法が工夫されたりしていくことになる。つまり、この実践・検証を続けていくことにより、自分のことばを求め続ける授業が数多く実践されることになる。



【図3 研究の手順】

## 2 研究計画

目標・内容・方法の順で研究を進めていく。

研究の期間は3年間を考えている。この研究は、全領域全単元で、自分のことばを求め続ける姿を設定することが大事である。その姿が設定されて初めて、適切な言語活動を伴う学習内容と指導方法が確立するため、図4に示したように3年間をかけて実践・検証していく。

実践する単元の領域は固定せずに研究を進めていく。

1年目は「自分のことばを求め続ける姿」の設定の基本的な考え方を明らかにする。

2年目は、適切な言語活動を伴った学習内容とはどのようなものを明らかにすることを中心に行う。3年目は、「自分のことばを求め続ける姿」を目指して、必要な指導方法を明らかにしていく。これら三つは、授業を行うにあたってどれも欠かせないものであるため、3年間を通して重点化を図りながら研究を行う。

	1年目	2年目	3年目
自分のことばを求め続ける姿（目標）	■	■	■
適切な言語活動（内容）	■	■	■
指導方法（方法）	■	■	■

【図4 研究の期間と内容】

## IV 研究の実際

### 1 実践の基本的な立場

本実践では、「自分のことばを求め続ける国語科授業」について、以下の視点で検証していく。実践の検証の仕方としては、子どもたちへの事前・事後のアンケート、授業中の発言、ノート、ワークシート等を分析して検証していく。

◇ 検証の視点

- 設定した自分のことばを求め続ける子どもの姿が表れたか。
- 設定した学習内容は妥当であったか。
- 自分のことばを求め続けさせる指導方法が妥当であったか。



## 2 授業の実践と考察

### (1) 第2学年「たしかめながら読もう」(教材「一本の木」光村2年下)の実践

#### ① 目標

- ア 説明書に関心をもち、説明するために必要な事柄や文章の組立てを考えながら読んだり、書いたりしようとする。
- イ 挿し絵と文を比較しながら読み、書くべき事柄や説明の順序をとらえることができる。
- ウ○ 叙述と挿し絵のつながりを確かめながら読むことができる。
- 説明に必要な事柄を集めて、分かりやすい説明文を書くことができる。

#### ② 自分のことばを求め続ける姿の設定

「しらべる」過程で順序を表す言葉の価値に気付き、絵の説明を文章に書く段階の姿である。

「知識・技能」	「思考力・判断力 (理由付けの仕方)」	「関心・意欲・態度」	自分のことばを求め続ける姿
○ 事柄の順序を考えながら、内容の大体を読む。 ○ 事柄の順序を考えながら、文と文との続き方に注意して書く。	○ 挿し絵と文章を照応し、共通点をとらえる。	○ 事柄の順序を考えながら、相手に伝わるように文章を書こうとする。	○ 挿し絵に合った説明に必要な事柄を確かめながら読み、事柄の順序を考えた分かりやすい文章を書く。

#### ③ 学習内容の設定

子どもの実態・既習経験	これまでに、子どもたちは一つの事柄を説明し、それを集めた図鑑作りや1枚の挿し絵を説明した文を、時間的順序に配列した紙芝居にする経験をしてきている。
言語活動の特性	本単元では、挿し絵に対応した説明を、それぞれ1枚ずつの画用紙に書き、それらを事柄の順序に配列して作る説明書作成を言語活動として取り上げる。 ○ 挿し絵を説明した文を、事柄の順序に沿ってつなげる時に、順序が分かる接続語の必要性に気付くことができる。



学習内容	挿し絵の説明を書いた画用紙を紙芝居形式にする言語活動を、「しらべる」過程と「ふかめる」過程で設定する。
------	---

#### ④ 指導計画(全12時間)

過程	主な学習活動 自分のことばを求め続ける学習内容の設定	自分のことばを求め続ける姿の設定	教師の働きかけ ◇自分のことばを求め続けさせる指導方法
つかむ・みとおす①	1 学習目標を設定する。 (1) お絵かきゲームを行う。 (2) 教材文を読み、共通課題を設定する。  「一本の木」の分かりやすいせつ明書を作ろう。	これまでの学習を思い出し、どのような学習ができるか課題をもつ。	◇ 学習の見通しをもたせるために、教師の説明に従って絵を描かせた後、説明書の発表モデルを提示する。
しらべる④	2～5 教材文を読み取る。 (1) 木の描き方を読み取る。 (2) 木の描き方を説明書にまとめる。 (3) 木の形を読み取る。 (4) 木の形を説明書にまとめる。	挿し絵と文章を照応しながら読み、順序を表す言葉の必要性を説明する。  説明に必要な事柄を確かめながら読み、事柄の順序を考えた文章を書く。	○ 説明の難しさに気付かせるために、教師が描いた絵を見てその描き方を発表させ、友達の説明に従って絵を描かせる「お絵かきゲーム」を行う。 ◇ 「しらべる」過程での課題をしっかりととらえさせるために、教師が読む教材文を聞いて「一本の木」の絵を描かせ、共通課題を設定させる。



ふかめる⑤

ふりかえる・いかす②

自分の伝えたい内容での説明書作成

6～10 絵の描き方やものの作り方の説明書をつくる。

(1) 個人課題について話し合う。

分かりやすいせつ明書を作って、絵のかき方やものの作り方を友だちにつたえよう。

(2) 実際に活動しながら、書くことに必要な事柄のメモをとる。

(3) メモを基に、説明を書く。

(4) 説明文を基に、友達に製作活動をしてもらい、分かりやすい説明であるか確かめ、修正する。

11～12 学習のまとめをする。

(1) 友達の書いた説明書を読み、製作活動を行う。

(2) 友達の表現のよさを発表する。

自分が説明したい事柄をゲームにして、友達に伝えたい課題をもつ。

自分が伝えたい説明に必要な事柄を集める。

自分が伝えたい内容で、事柄の順序を考えながら、文と文との続き方に注意して文章を書く。

友達が聞いて描いた絵を見ながら、自分の説明を読み返す。

友達が書いた説明書を大事なことを落とさないように開き、製作活動をする。

○ 自分のことばで表現させるために、教材文を読んで読み取った内容を、自分のことばで絵入りの説明書にまとめさせる。

◇ 学習の見通しをもたせるために、教師の説明に従ってものを作らせた後、ものの作り方の発表モデルを提示し、個人課題を設定させる。

○ 分かりやすい説明書を書かせるために、実際に絵を描いたり、ものを作ったりしながら、説明に必要な事柄をメモさせる。

◇ 相手意識をもって説明書を書こうという意欲をもたせるために、友達とお互いに読み合い、絵を描いたり、ものを作ったりしながら、分かりやすい説明かどうか確かめさせ、説明を書き加えたり、修正したりさせる。

⑤ 実 際 (2 / 12)      学習課題・まとめ      子どもの反応      教師の発問

主な学習活動	自分のことばを求め続ける姿の設定	子どもの意識の流れと教師の働きかけ
1 「一本の木」の描き方の説明を聞き、木の絵を描く。	何をどう描くのか、大事な事を落とさないようにしながら聞き、聞いたことを絵に描く。	<p>◇ 明確に学習課題をもたせるために、教師の説明に従って絵を描かせるお絵かきゲームをする。</p> <p>◇ お絵かきゲームの後に、前時に聞いた説明と比較させて、学習課題を設定する。</p>
2 学習課題を設定する。	前時の説明と比べて、学習課題を設定する。	<p>昨日、絵を描いた時よりも、ゲームの答えに似ている絵が描けたね。</p>
3 学習の進め方を確認する。	挿し絵と文章を照応して、大事な言葉を抜き出す。	<p>先生が説明したとおりに描いたら、同じような木の絵になったよ。</p> <p>昨日の説明より、分かりやすいよ。どうしてかな。</p>
4 一人調べをする。	4枚のカードに自分のことばで説明を書く。	<p>木を分かりやすくかくためには、何が大切だろうか。</p>
5 分かりやすい説明書の書き方について話し合う。	「まず」「つぎに」などの順序を表す言葉の必要性を説明する。	<p>○ 自分のことばで表現させるために、大事な言葉にサイドラインを引かせ、その言葉と自分のことばで木の描き方の説明を書かせる。</p> <p>ここは、教科書の言葉を使おう。</p> <p>分かりやすく説明するためには、どんな言葉に言い換えられるかな。</p> <p>○ 明確に課題をつかませるために、木の挿し絵が1本ずつ描かれた4枚のカードに説明を書かせる。</p> <p>どうして、この言葉を入れたの。</p> <p>この言葉があると、絵を描く順序が分かりやすいよ。</p> <p>教科書と違う言葉だけれど、本当に必要なの。</p> <p>「さいしょに」や「はじめに」は、教科書の「まず」と同じことを言っているよ。</p> <p>順序が一番よく分かるのは、「一番目」「二番目」だから、その言葉を使ったよ。</p> <p>じゅんじょをあらわすことばを入れると、せつ明書が分かりやすく書ける。</p>
6 学習のまとめをする。	書きかえたり、付け加えたりして、自分のことばで説明しているワークシート	

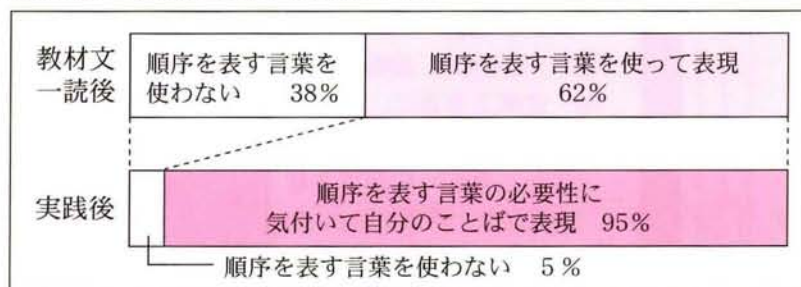


本授業では、挿し絵に照応した文を、紙芝居形式の説明書にする言語活動を設定した結果、子どもたちは教科書の言葉を選んだり、より分かりやすく自分のことばで説明書を書いたりする姿が見られた。そして、友達と自分の表現を比較したり、話し合いを行ったりする活動を通して、順序を表す言葉の必要性について理解し、それを自分の説明書に加除・修正していた。

## ⑥ 結果と考察

ア 設定した自分のことばを求め続ける姿が表れたか。

単元終末に、子どもが書いた自分の伝えたい内容での説明書を読むと、図5のような結果になる。図5から分かるように、事柄の説明において、順序を表す言葉



【図5 自分のことばで表現する子どもの姿】

葉が大切であることを理解し、実践後に自分のことばで表現している子どもが増えていることが分かる。「自分のことばで表現」とは、「まず」「最初に」「はじめに」「一番目に」などの言葉を使って、順序を意識して、より分かりやすく表現しようとしている子どもの姿である。よって、設定した自分のことばを求め続ける姿が表れていたと言える。

イ 設定した学習内容が妥当であったか。

本単元では、教材文での説明書作成、自分の伝えたい内容での説明書作成を言語活動として設定した。単元全体を通して、紙芝居形式での説明書作成という言語活動を設定したことで、子どもたちは、教材文で学習したことを生かして、自分の伝えたいことを表現することができた。よって、設定した学習内容は妥当であったと言える。

ウ 自分のことばを求め続ける指導方法が妥当であったか。

### ○ 事象提示の工夫

導入で、お絵かきゲームを行った結果、子どもたちは、相手意識・目的意識をもち、より相手に分かりやすい説明をしたいという意欲が高まった。単元を見通したゲームを行うことにより、その後の活動に意欲的に取り組ませることができると考える。



### ○ 学習課題の設定

「しらべる」過程で共通課題を、「ふかめる」過程で個人課題を設定した。それぞれの過程において課題を設定することにより、明確に課題をもつことができた。低学年においては、短い過程で課題を設定することで、活動に意欲的に取り組ませることができると考える。

### ○ 相互評価と自己評価

「しらべる」「ふかめる」過程で、自分の書いた説明書を、友達に読み、絵を描いたり、ものを作ったりする活動を行った。子どもたちは、自分の説明を聞いた友達の活動の様子から、自分の説明書の分かりやすさを評価することができ、最初に書いた説明書にことばを書き加えたり、修正したりすることができたと考える。



## (2) 第6学年「聞く人の心に届くように発表しよう」(教材「今、わたしは、ぼくは」 光村6年下)の実践

### ① 単元目標

- ア 8年後の自分や友達へメッセージを伝えることに関心をもち、聞き手によく伝わるように事例や構成、読み方などを工夫しようとする。
- イ 集めた事例を関係付けて、自分の意図を伝えることができる。
- ウ 8年後の自分や友達にメッセージを伝えるという目的をもって、話す事柄や構成などを工夫したスピーチを行うことができる。

### ② 自分のことばを求め続ける姿の設定

「しらべる」・「ふかめる」過程で、設定した気を付けるポイントを基に、自分や友達の前稿を見直す段階の姿である。

「知識・技能」	「思考力・判断力 (理由付けの仕方)」	「関心・意欲・態度」	自分のことばを求め続ける姿
○ 伝えたいことが伝わるように、話す事柄や構成、文章表現を工夫して書く。	○ 自分の体験や経験のいくつかを関係付けて、自分の伝えたいことを考える。	○ 内容を伝わりやすく書き直すことに関心をもち、自分や友達の前稿を見直そうとする。	○ 伝えたいことが伝わるように、事例や構成、文章表現などを見直す。

### ③ 学習内容の設定

子どもの実態・既習経験	これまでに、子どもたちは一つのことにグループごとにディベート形式で話し合い、事例を基に自分が考えたことを、資料などを活用して発表する活動を行っている。
言語活動の特性	本単元では、二十歳になった自分に伝えたいことが伝わるように、構成を工夫してスピーチしたり、スピーチの意図を聞き取ったりすることを言語活動として取り上げる。 ○ 自分の伝えたいことがスピーチで伝わるように、構成や表現を工夫して話すことができる。

学習内容	自分の伝えたいことを伝えるために、原稿を作成する言語活動とスピーチする言語活動を、それぞれ「しらべる」・「ふかめる」段階と「ふりかえる・いかす」段階に設定する。
------	--

### ④ 指導計画 (全6時間)

過程	主な学習活動	自分のことばを求め続ける姿の設定	教師の働きかけ
	自分のことばを求め続ける学習内容の設定		◇自分のことばを求め続けさせる指導方法
つかむ・みとおす①	1 学習目標を設定する。 (1) タイムカプセルに入りたいものについて考える。 (2) 教材文を読み、共通課題を設定し、学習計画を立てる。 今の気持ちを、「8年後」に伝えるためのスピーチ発表会をしよう。	卒業を前にしてこれまでの生活を振り返り、そのことを身の回りの人に伝えたいという思いをもつ。	○ 8年後の自分を意識させるために、卒業前に作成するタイムカプセルに何を入れたいか考えさせる。 ○ 学習やスピーチの内容に見通しをもたせるために、教材文を読ませたり、今、自分が考えていることを発表させたりする。
しらべる②	(3) 伝えたいことを決め、メモに事例や考え、説明、決意などを書き込む。 2～3 原稿を作る。 (1) メモを入れ替え、構成を工夫して原稿を作る。	自分の体験や経験から、伝えたいことに適切な事柄を集める。	◇ より具体的な課題にさせるために、どのような原稿にしたいのか単元名を意識して設定させる。 ◇ 見直しに必要感をもたせるために、見直ししていない原稿と見直しした原稿のスピーチを比較させる。
ふかめる②	(2) 自分や友達の意見を基にして、原稿を見直す。 4～5 原稿を基にして相手の心に届く話し方を考える。	伝えたいことが伝わるように、事例や構成、文章表現などを見直す。 よりよく伝えるために、声量や速度に気を付ける。	◇ 伝わりやすい原稿になっているかを考えさせるために、自分で見直しさせたり、ペアで見直しさせたりする。




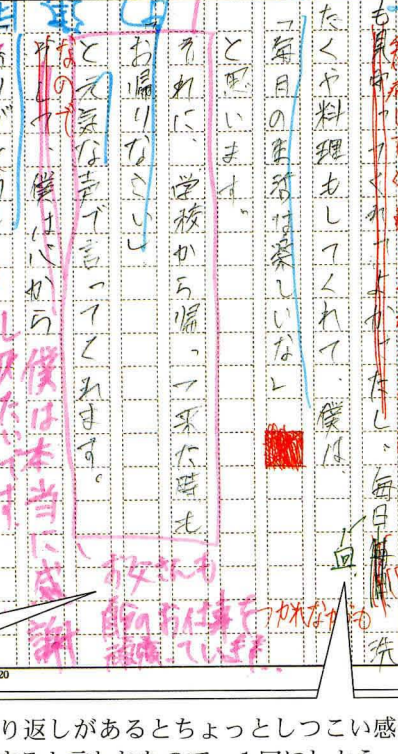
ふりかえる・いかす①	スピーチの実践	<p>(1) 聞きやすさを意識して、話し方を考える。</p> <p>(2) 要点やキーワードを使ってスピーチする。</p> <p>6 スピーチ発表会を開く。</p> <p>○ 友達の伝えたいことや、それを支える事例を聞き取る。</p>	原稿を見ずに、相手を意識したスピーチをする。	<p>◇ 聞きやすい話し方になっているかを考えさせるために、ペアでお互いのスピーチを聞かせ合い、意見を交換させる。</p> <p>○ 相手の意図を聞き取らせるために、聞き取ったことをワークシートに記入させる。</p>
------------	---------	---	------------------------	--

## ⑤ 実 際 (4 / 6)

### 学習課題・まとめ

### 子どもの反応

### 教師の発問

主な学習活動	自分のことばを求め続ける姿の設定	子どもの意識の流れと教師の働きかけ
<p>1 教師の作成した原稿と発表モデルを視聴する。</p> <p>2 学習課題を設定する。</p> <p>3 原稿を見直して行った発表モデルを視聴する。</p> <p>4 学習の進め方を確認する。</p> <p>5 自分の意図が相手に伝わるように原稿を見直し、スピーチする。</p>	<p>教師の伝えたいことが何かを考えながら、原稿を読んだり発表モデルを見たりする。</p> <p>原稿や発表モデルから、相手に伝わりやすい内容の必要性に気付く。</p> <p>見直す前の原稿と、見直した原稿を基に行った発表モデルとを比較して、見直しの観点に気付く。</p> <p>伝えたいことを考えて、事例や構成の適切さについて考える。</p> <p>友達の意見を基に、自分の原稿を見直す。</p>	<p>◇ 原稿を見直す必要性に気付かせるために、不完全な原稿とスピーチを提示する。</p> <p>敬体と常体が混ざっている。</p> <p>伝えたいことがはっきりと分からない。</p> <p>聞く人の心に届くように原稿を見直すには、どのようなところに気を付けたいだろうか。</p> <p>問いかけや呼びかけが入っている。</p> <p>難しい言葉は使わない方がいいよね。</p> <p>◇ 相手意識を明確にした課題に目を向けさせるために、どのような原稿にしたいのかを考えさせる。</p> <p>◇ 自分の原稿が伝わりやすいかを考えさせるために、自分で見直したり、ペアで見直したりさせる。</p>
	<p>どのポイントで書き直しましたか。また、どうしてそう書き直したのですか。</p> <p>自分がいつも以上にがんばった思いが伝わるように、「よけい」と思う言葉を増やそう。</p> <p>この表現では、自分が感謝していることがはっきりと伝わりそうにないな。</p> <p>最後に呼びかけを入れて、感謝の気持ちを伝えよう。(呼びかけ)</p> <p>その結果、どうだったのかが分かるようにした方がよさそうだ。(よりよい事例)</p> <p>ここには、両親のがんばりが伝わる事例を入れた方がいいな。(よりよい事例)</p>	
<p>6 学習のまとめをする。</p>	<p>見直した原稿を読み、伝わりやすくなったことから、見直しの観点の適切さを理解する。</p>	<p>繰り返しがあるとちょっとしつこい感じがすると言われたので、1回にしよう。</p> <p>気を付けるポイントを基にすると、伝えたいことが伝わりやすくなった。</p>



本授業では、教師の発表モデルを参考にして原稿を見直す学習内容を設定した結果、子どもたちは、見直しの観点に沿って自分の原稿を書き直したり、友達の原稿について意見を交換したりする姿が見られた。そして、見直した原稿を基に友達にスピーチする活動を通して、見直すことの必要性や有効性を実感していた。

## ⑥ 結果と考察

ア 想定した自分のことばを求め続ける姿が表れたか。

表2は、本時で用いた原稿から、どの観点を基に見直しを行っているかを表した結果である。

このことから、見直した観点では自分や聞き手に対する呼びかけが最も多く、全体の約半数が見直したり新たに取入れたりしていることが分かる。同じように話しかける表現である問いかけにも目を向けている子どもが約3割ほど見られた。事例については、適切な事例に変更した子どもや構成を変更した子どもがそれぞれ数名ずつ見られた。つまり、子どもたちが相手に伝わる表現にしようとして構成を工夫していることが分かった。よって、想定した自分のことばを求め続ける姿が表れていたと言える。

○ 呼びかけを取り入れた。	18名
○ 問いかけを取り入れた。	12名
○ 文末を敬体にした。	11名
○ 事例を変更した。	7名
○ 構成を変更した。	6名
見直した観点と人数（延べ人数）	

【表2 自分のことばで表現する子どもの姿】

イ 設定した学習内容が適切であったか。

原稿を書く活動とスピーチする活動を分けて設定した。子どもたちの原稿を見ると、原稿を書く活動では主に事例の構成に目を向け、伝えたいことが伝わる原稿になるようにしていた。さらに、原稿を基にスピーチする活動では、お互いのスピーチを聞き合うことで、聞いている人を意識した表現にしたり読み方を工夫したりする姿が見られた。よって、設定した学習内容は妥当であったと言える。

ウ 自分のことばを求め続ける指導方法が妥当であったか。



○ 事象提示の工夫

本単元では、原稿作成の導入で、見直していない原稿と見直した原稿、それぞれを基にして行った発表モデルを比較させた。その結果、子どもたちが自分自身で、原稿を見直す観点到気付くことができた。

さらに、見直した原稿をスピーチすることで見直しの有効性に気付くことができた。よって、設定した指導方法は妥当であったと言える。

○ 学習課題の設定

単元のめあてとしては、第1時に「今の気持ちを、『8年後』に伝えるためのスピーチ発表会をしよう。」であったが、原稿を見直したり、スピーチの練習をしたりする過程を追うごとに、「相手に分かりやすく」という相手意識を感じさせるめあてが設定されるようになった。つまり、学習が進むにつれ、単元のめあてが具体的でより高次なものになっていった。



## ○ 相互評価と自己評価

「ふりかえる」「いかす」過程で、自分の書いた原稿を基にしたスピーチを友達に対して行ったり、「しらべる」過程で、原稿を自分の考えや友達の意見を基に見直しを行ったりした。このような活動の中で、子どもたちは目的や相手に応じて原稿を見直したり、話し方を工夫したりしたことから、自分の原稿やスピーチを評価していたと考えることができる。どちらの活動にも、発表モデルを提示することで、子どもたち自らが観点を設定し、それらを基に評価することができた。

## V 研究の成果と課題

私たちは、「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」という研究主題を設定し、子どもたちが授業の中で、自分の伝えたいことをもち、その伝えたいことを相手や目的などに応じて、相手によりよく伝わるように伝えることに、意欲的に取り組む姿を求めて研究に取り組んできた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

成果としては以下の三つが考えられる。

学  
習  
内  
容  
と  
指  
導  
方  
法  
の  
研  
究  
が  
必  
要  
。

○ 「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」の基本的な考え方が明らかになり、目指す子どもの姿を設定することができた。

○ 適切な言語活動を伴った学習内容を設定したことにより、授業の中で、意欲的に自分の伝えたいことをもち、自分の伝えたいことを伝える姿が数多く見られるようになった。

○ 「自分のことばを求め続ける国語科授業の創造」に必要な指導方法として、導入の事象提示の仕方、学年に応じた学習課題設定の仕方、相互評価や自己評価を行う場の設定が大事であることが分かった。



課題として以下の二つが考えられる。

● 適切な言語活動を伴った学習内容を設定するとき、目的や相手、場や意図などの意識が必要であると考えますが、発達段階に応じて、特にどの意識を大切に設定した方がよいのかを明らかにすべきである。

● 自分のことばを求め続ける指導方法として、三つの指導方法を明らかにしたが、他にどのような指導方法が効果的であるかを検証すべきである。

### 【参考文献及び資料】

「小学校学習指導要領解説 国語編」

文部省

(平成11年 東洋館出版社)

「伝え合い学び合う国語教室」

中越国語教育研究会 著

(2005年 東洋館出版社)

「学習意欲の心理学」

桜井 茂男 著

(1997年 誠信書房)